単元の言語活動1　　［　　年　　組　　番　名前　　］

# ◆ フィクションの特性を話し合う

## ――小説の世界を観察し、思い切って参加する――

**課題**　「小説などのフィクションを通して、私たちは、効果的に常識的な道徳観や認識を問い直していくことが多い。効果的になるのはなぜなのか。構成や描写について、具体例を挙げながら話し合ってみよう。

1 フィクションの舞台設定や人物設定に注目しよう。

①『羅生門』と『城の崎にて』の舞台設定について、それぞれどのような点が工夫されているのか、小説の内容を振り返りながら考える。

②『羅生門』と『城の崎にて』の主人公（「下人」「自分」）について、小説の始まり近くで示される設定をまとめ、読者にどのような展開を期待させるのか、考える。

| ①舞台設定 | | ②主人公 | |
|---|---|---|---|
| ●『羅生門』 | | ●『羅生門』 | |
| ●『城の崎にて』 | | ●『城の崎にて』 | |

2 『羅生門』と『城の崎にて』について、印象に残った場面や気になる語り口を抜き出し、それぞれの表現の特徴を比較することで、小説の内容と表現のつながりを考えてみよう。

| | |
|---|---|
| ●『羅生門』 | |
| ●『城の崎にて』 | |
| ●考えたこと | |

3 『羅生門』の末尾は「下人の行方は、誰も知らない。」であり、『城の崎にて』の末尾は「自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。」である。こうした締め括り方は読者に何を投げかけるのだろうか。それぞれの小説がどのような先入観を問い直したのかとかかわらせて、考えてみよう。

| | |
|---|---|
| ●「下人の行方は、誰も知らない。」（『羅生門』） | |
| ●「自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。」（『城の崎にて』） | |

4 小説などのフィクションの効果を考えるための方法として、模擬裁判を行ってみよう。語り手に導かれた読み方を受け取るだけでなく、自分の視点で捉えてみれば、積極的に小説の世界を問い直せるのではないだろうか。そうした読みの実践として、検察官・弁護士・裁判官（陪審員）に分かれ、小説を調書に見立てて、登場人物の言動などを吟味し、原告・被告それぞれに寄り添いながら議論に参加してみよう。

①『羅生門』　原告＝「老婆」　被告＝「下人」

②『城の崎にて』　原告＝「いもり」　被告＝「自分」

●自由にメモしよう